

・筑紫女学園短大 保刈禎子 延世大学 都在恩

目的 前報に於て佛教発生地であるインド及び其の周辺の南方佛教国では袈裟は比丘、比丘尼の衣服制服であることをビルマの袈裟により報告した。そこで今回は我國に最初に北方佛教を伝えた韓国の法衣について報告する。

方法 韓国の佛教宗団の中で最も大きな宗団である曹溪宗を中心に法衣を調査した。1977年以來4回にわたり訪韓し、延世大学校都在恩氏と共同研究で調査した。

制作関係者、着用者より聴取り調査を行い更に現物による縫製構成方法も調べた。

結果 佛教が中国から韓国へ渡来したのはAD67年で更に韓国から日本に来たのはAD538年とされている。インド、中国、韓国、日本にも渡来する間に法衣は次第にその国の気候、風土、政治の影響を受け、又その国の文化と融合して独自の法衣が生まれた。

韓国では民族服の上に長衫を着用し、その上に五条袈裟又は大袈裟を付ける。袈裟は比丘僧は褐色、事帯僧は濃紅色と区別される。大袈裟には上部に日月繡や二足鳥、月に鬼の繡があり、下部に玉の繡がある。材質は殆ど合成繊維又は木綿を使用する。全体的に簡素に統一化された。縫製方法は現在では殆どミシンで行うが手刺し却刺法で葉の部分に刺すことも行われている。五条袈裟は非常に小型化し我國の絡子の型と相似ている。

又、我國の法衣史上見られる褌衫は語として現在も使用されているがその型は裳付き衣又は直綴の型である。又長衫褌衫其他の履物すべて灰色ノ色を用いる。

佛教と云う同一宗教の上で宗教服が如何なる変遷を見せるか、日本と韓国とでその共通点又差異点を調査し服飾研究の一端としたい。